論語子張篇研究

――論語の原典批判その一――

佐藤一郎

序

論語の原典批判に關する業績は、武内義雄「論語之研究」及び津田左右吉「論語と孔子の思想」藤塚鄰「論語總說」などによつて、極めて高い水準に達している。しかるに武内・津田兩氏の說は運命的とも歎じたいほどの決定的分裂を示めし、後輩をして研究の方途をいかに選擇すべきかの點で絕望感を與えている。私の研究は、この絕望的狀況下において、武内氏がその說のよりどころとし、津田氏が否定するところの、論衡正說篇の記事の無い狀態を想定し、新しい研究上の再出發を企圖するものである。

私は論語がどのような經過をたどつて、今日のような形態と內容のものになつたかを知ろうとする單純な疑問より出發する。論語が成立當初より、ただちに今日のような姿であつたということは、これまでの諸研究によつて簡單に否定できる。ではどのような經過をたどつたか。今日までの諸研究及び論語に關する傳承よりして、次のような經過を假說として推定できるのではなかろうか。孔子及びその高弟達の言行はメモとして記錄されていた。しかしそれは短いもので心覺えのようなものであつた。今日の論語の章句の起源がそれである。その章句は、時間の經過につれ、種々の理由によつて結合をはじめるのは當然である。ここに群としてこれらの章句が存在することになる。この群が更に結合し、或はその前後やその內部に種々の編集意識の下に、獨行していた章句が添加され、かくて適當な量に達して篇が成立した。その篇がいくつか連合して篇の群が出來、その篇の群が更に統合されて今日の論語になつたのであると。この後半を論じているのが武內、論語之研究である。

以上の假說は津田・武內の兩說をともに或る程度まで矛盾なく統合せしめうるものである。章句の句の群が一度成立すれば、既に時間の經過とある種の傳承をえている結果として、それだけのことからでも傳統的權威を帶びることになり、その群を再編集しなおすことはさしひかえられやすい。かくて一貫した編集なるものは爲しにくくなり、篇を全體として編集意識より解說することは無理を伴うのである。一例を擧げれば、武內氏は八佾篇の研究において（論語之研究一二六―一二三頁）篇內の章句の順を、一・二・四・二六・六・二二・二一・爲政二三・九・一四・一〇・……としている。爲政篇ではこれほどでもないが、やはり相當に章の配列を變更して、全體の構成より一篇の編輯意圖を推定している。まことに「私は武斷の譏を辭せず敢て臆測を加えて、章句の順序に修正を加えて、河間七篇本の內容を考えて見ることにする。」（一一〇頁）である。

以上の二篇は章句の群を設定して、その視點より考察すれば、爲政篇は第五・六・七・八の孝に關する諸章の群、一二・一三・一四の君子に關する群、一五・一六・一七・一八の君子たらんとするものの心掛けの群、一九・二〇・二一の政治論の群及びそれらの群の前後に介在する獨立章句より構成されることになる。八佾はそれ自體、一つの禮樂というテーマで統一される大きな群で、その中に、今日の解釋では禮樂とむすびつけられていないが、群に屬するものとして編纂者が考えたとすれば、禮樂と關連ずけ得ないでもない第五章「子曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡也」と、第二十四章「儀封人請見……」とがあることになる。

群という觀念を何故に論語研究にもちだしたかと云えば、武内氏のごとく篇を單位とすることはできず、さりとて津田氏のように論語が、「深い心もちゐ」なく（津田、二八八頁）、編者によつて集められたとして、「論語について考へるには、二十篇の區別を一おう解きほぐし、或るまとまつたことが說いてある一章づゝのものとして、それをとりあつかはねばならぬ。」（一五六頁）には、直ちに、讃同もしかねる。論語を素直に閲讀すれば、形式上やテーマ上でかたまつている章句の群があきらかに散在し、章の數の多小はさまざまであるにせよ、その群が形成されていること自體、既に論語批判上の問題である。編集という問題を心に抱いて、論語をくりかえし讀むとき、現實に疑念なくつかみうるのはこの群である。このギリギリの線から論語批判を再出發させようというのが、私の提案である。「群」の問題こそ論語成立の謎を解く鍵ではあるまいか。梁の皇侃の義疏に曰く、「古論分堯曰下章子張問、更爲一篇、合二十一篇、篇次以鄕黨爲第二篇、雍也爲第三篇、篇內倒錯不可具說、」と。古論といかにことなるにしても、今本の篇內の問題をこれから考えることにする。武內義雄「論語之研究」もやはりこのことを試みているのであり、その意味では武內氏の研究の展開でもある。

述而第七をここで考察してみたい。この篇には群はテーマ上では發見できない。しかし形式上では面白い現象が存在する。大部分の章句が「孔子曰」を主體とするのに、ところどころ孔子の行爲の描寫が散在する。それをカッコでかこむと、次のような現象があらわれる。一・二・三・(四)・五・六・七・八・(九)・一〇・一一・一二・一三・一四・一五・一六・(一七)・一八・一九・(二〇)・二一・二二・二三・(二四)・二五・二六・二七・二八・二九・三〇・三一・(三二)・三三・三四・三五・三六・三七・(三八)。この現象は、「孔子曰」の數章の後に、孔子の行爲の描寫を置いて締めくくるという形式をもつ群の反復をも想定せしめるようだ。鄕黨篇の性質をもとにして、論語二十篇を前後に分ける考え方と對應させると、編集意識より見て、前論十篇の構成と同種と見なしえよう。

群の觀念は、雜然とあつめられた幾つかの章の群をも含みうるものであるが、これは摘出が困難で、述而篇のような場合或は前後の章の狀況によつてのみ推定できるにすぎない。形式上の類似、例えば泰伯第八の第三章から第七章に至る「曾子曰……」の曾子語群、テーマ上の類似、例えば里仁第四の第一章から第七章にいたる仁に關する諸章の群、及び意味上の關連をもつ群（これは後に附論において論ずる）、以上の三種の群によつて、これから論語批判上の諸問題を論じてゆくことになる。

和辻哲郎先生の「ホメーロス批判」によつて教えられた解釋學的方法を、論語中の章句の群を手がかりとしてその編集意識の分析に適用せんとした試論であることをことに附言する。參考文獻はこのテーマにおいてはほとんど存在しない。武內「論語之研究」、劉寶楠「論語正義」などの引用をしているが、これらは私個人の主觀的解釋を避ける爲の便宜的使用とも言える。
尙、テキストと章句番號は便宜上、岩波文庫版によつた。

本論　子張篇の研究

子張篇に關する先人の諸說を述べ、次にその原典批判を通じて、その成立に伴う諸問題を論究することにしたい。

伊藤仁齋は論語二十篇を上・下の二つに分け、子張を含む下論十篇を上論十篇の補遺として、後から續集せられたものだと論じ、淸の崔東壁も下論を後人の續記したもので、體例も亂れ、特に最後の五篇（李氏・陽貨・微子・子張・堯曰）がよくないとしている。子張篇については、門弟子の語のみを錄して文體も少しく違っているし、孔子を仲尼と呼んでいるのも他篇に見ない例であると批評を下している。武內義雄は、「論語之研究」（四九一頁）において、以上の二說を引用し、更に說を發展させ、五篇中でも李氏・陽貨・微子を問題が更に多いといして、下論中よりこの三篇をけずり、殘りの七篇（先進・顏淵・子路・憲問・衞靈公・子張・堯曰）を以て獨立させ、別種の論語、すなわち齊論の原始的形態であるとした。更には子張篇の考察を行う際に（五八―六三頁）、この篇は諸弟子の言を集めているが、その中心人物は子貢で、彼に次いで子夏・子游の言が重要な役割を演じている點に留意すると、この篇は子貢派の手になつたらしい。齊論と思はれる七篇の大部分はこのように子貢派後學の論語で、曾子派の論語（河問七篇本―爲政・八佾・里仁・公冶長・雍也・述而・泰伯）とは別派であることも論ずる。津田左右吉は季氏・微子・子張・堯曰の四篇は、論語が一たびまとめられた後になつて、編集されつけたされた―但しそう遠くない時代（戰國末期）に―と解している（津田氏・二七六頁）。

まずこの子張篇の研究に必要な限度で、本文を示めしておく。

一、子張曰、……

二、子張曰、……

三、子夏之門人問交於子張、子張曰、子夏云何、對曰、子夏曰、可者與之、其不可者距之、子張曰異乎吾所聞、君子尊賢而容衆、嘉善而矜不能、我之大賢與、於人何所不容、我之不賢與、人將距我、如之何其距人也。

四、子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、

五、子夏曰、……

六、子夏曰、……

七、子夏曰、……

八、子夏曰、……

九、子夏曰、……

一〇、子夏曰、……

一一、子夏曰、……

一二、子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退則可矣、抑末也、本之則無、如之何、子夏聞之曰、噫、言游過矣、君子之道、孰先傳焉孰後倦焉、譬諸草木區以別矣、君子之道、焉可誣也、有始有卒者、其唯聖人乎。

一三、子夏曰、仕而優則學、學而優則仕。

一四、子游曰、喪致乎哀而止、

一五、子游曰、吾友張也爲難能也、然而未仁。

一六、曾子曰、堂堂乎張也、難與竝爲仁矣。

一七、曾子曰、……

一八、曾子曰、……

一九、孟子使陽膚爲士師、問於曾子、曾子曰、上失其道、民散久矣、如得其情、則哀矜而勿喜。

二〇、子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉、

二一、子貢曰、……

二二、衞公孫朝問於子貢曰、……子貢曰、……

二三、叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢仲尼、子服景伯以告子貢、子貢曰、……

二四、叔孫武叔毀仲尼、子貢曰、無以爲也、……

二五、陳子禽謂子貢曰、子爲恭也、仲尼豈賢於子乎、子貢曰、君子一言以爲智、一言以爲不智、言不可愼也、夫子之不可及、猶天之不可階而升也、……

子張篇を「群」の視角から考察すると、一見しただけで、子張、子夏、子游、曾子、子貢の語錄が並んでいることがわかる、しかし切れ目となると、子張語群と子夏語群においてふしぎなことがある。第一、二、三と子張の語がつゞくが、第三章は子夏の言に對して子張が自說を主張する形式である。ここに初めて出てくる子夏が第四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三と續く各章の主人公であり、次に一四、一五と子游の言が出てくる。子張語と子夏語との關係を考察すると、第一二章はあきらかに第三章と形式的に類似していて、子游の言がでて、それに子夏が反論するもので、第一三章は內容的に第一二章の子夏の言の同義異語と見なしうるからこの獨立性を消去して第一二章に附すると（論語におけるこのような傾向を附論で論ずるから、證明を略する）、第一二章が次の第一四、一五の子游の言をよびおこしていることがわかる。第一六、一七、一八、一九の諸章は曾子の言であることによつて、あきらかに一つの群をなしているが、この曾子語群と子游語群の間には前のような形式のつながり方は存在しない。しかし第一五章と第一六章とは、いずれも子張を仁に關して批判することによつて關連づけられている。

このように群と群との結合の形を見てくると、そこにくさりのようなつながり方が看取される。連鎖式編集法と名付けられるであろう。群の結びつけ方として、並列法とこの連鎖法とが論語の特徵である。他に例をあげれば、顏淵第十二において、

一、顏淵問仁、子曰、……

二、仲弓問仁、子曰、……

三、司馬牛問仁、子曰、……

四、司馬牛問君子、子曰、……

五、司馬牛憂曰、……

がある。第一、二、三の「問仁群」と、第三、四、五の「司馬牛」群が第三章でつながつている。又、微子篇第十八では第一章から第五章までは位を去るのことであり、第五章から第八章までは孔子の使命感を述べるものであり、第八、九、一〇、一一の各章は殷周の際の士についてのことで、この三群もあきらかに連鎖的とみてよかろう。かつ全體としては遺佚の士のことである。

（注）連鎖式表現は民族形式である。木蘭詩中の「軍書十二卷、卷卷有爺名」。「壯士十年歸、歸來見天子、天子坐明堂」。「出門看伙伴、伙伴皆驚徨」。とか、宋の六一居士詩話にも見え（東洋文學研究第六號、船津富彥氏）、民歌にも多い。

禿子禿、蓋房屋、房屋漏、種蠶豆。蠶豆開花、禿子搬家。搬到那裏、搬到興化蘇北。（興化民歌）

これまでの說明によつて、第一章より第一九章にいたる間には、子張、子夏、子游、曾子の言葉の群が存在し、それが連鎖式に編集されて配列されていることが明確になつたと思う。更に進んで第二〇章から第二五章にいたる子貢語錄について見るに、第二〇章がその前に存在する曾子語錄に連絡している事實は認めがたい。何か政治上のことと見ればつながるようでもあるが、これまでのように明確なものではなく、斷絕していると認めるべきだ。孔子の高弟達の語錄の集りという子張全體の性質には適合しているが、連鎖式編集法という點から考えれば、あきらかに異質なつなぎ方——意識的なつなぎ方がみいだせないという意味で——であることになる。故に第一章より第一九章までの編集と、それに第二〇章以下を附加させた編集との間にギャップを認め、まず子張篇をここで二つの部分に分割すべきであると考える。

子張篇を二つに分割すると、その前半部、すなわち第一章より第一九章にいたるものは、四人の孔子高弟の語錄が連鎖狀に編集されたものとなる。これは既に指摘濟みであるが、この編集について、これから解釋學的研究を行いたい。當然、結合點をなしている第三章、第一二章と第一五・一六章及びその前後の章の編集上の意味が問題となる。

子張語錄と子夏語錄を結ぶ第三章と子夏語錄と子游語錄とを結ぶ第一二章（但し第一三章は第一二章に入る）とは、その形式においても、その前後の章との關係においても全く同一のものであるがあるが、まず第三章からその性質を更にふかく檢討してみよう。一讀するのみで、この章は本質的に子張語錄に屬することがわかる。この章の書き手は子張と子夏とのいずれをまさつているとしているか。「ほとんどの註釋者は、子張にしたがい、子夏をあやまてりとする、」と劉寶楠を論語正義で述べ、子夏の說、必ずしも子張に劣らざることを論じているが、この章の書きぶりからは（思想內容自體からは別として）、何としてもそれは無理で、朱子を含む多數の認めるように、子張の言は子夏のよりも優位におかれ、子張は子夏よりも勝る人であることを表現していることを認めざるを得ない。次に第一二章では同樣にして、子夏は子游に勝る人として、筆者に意識的に表現されている。この點はあらゆる註釋者の說は同一である。ここにおいて我々は、子張は子夏に勝り、子夏は子游に勝るという價値判斷の系列を、第一章より第一五章にいたる間に認めざるを得ない。

ところが子游語錄と曾子語錄との間において、連鎖の仕方は前二回と本質的にちがつていた。子游と曾子のいずれが偉大であるかということではなく、

子游曰、吾友張也爲難能也、然而來仁。

曾子曰、堂堂乎張也、難與竝爲仁矣。

という兩章の內容が、子張を仁すなわち儒家の最大最高の德の點で批判することによつて連つている。すでに分析によつて示めされた高弟達への價値判斷という視角より眺めれば、あきらかにここでも同じく價値判斷が行はれているのである。だが、子張子夏子游という價値の序列の承認の上で、曾子語錄がつづいているのではない。第一五・一六の兩章においては、子張は秀れた君子ではあるが、仁の點では批判を受けねばならぬ人間として、子游と曾子によつて語られている。曾子は子張、子夏、子游の價値序列の批判者として出現しているのだ。

戰國時代における儒家內の學派については。韓非子顯學篇に儒家八派が、荀子に非十二子篇がそれぞれ存在することによつても、一應推定されるが、「論語編纂には儒家の學派性が認められない」（津田、前揭書二七九―二八二頁所論）とは、どうも言えなくなつて來た。特にこのように曾子語錄がその連鎖の仕方において、子張を批判することと、これまでの形式とは異つたやり方で續集されていることによつて、曾子學派と子張、子夏、子游の學派との對立を認める學界の定說をここに導入しなければならない。すなわち、子張、子夏、子游の價値序列の批判者として曾子をもちだしたのは、曾子後學のしわざではあるまいか。

第一章より第一九章にいたる語錄を編集した人、これは曾子學派の人であつたと私は考えるのだが、彼はどのような狀況下で、このような編集法をとつたのであろうか。もし彼がバラバラの獨立している語を集めたり、あるいは子張、子夏、子游のそれ自體としては、あるまとまりをもつ語錄を個々に集めて作つたならば、價値判斷によつてつらなる立前からも、おそらく曾子をトップにもつて來て、彼が最も偉大であるように、この價値判斷を含む系列を作製したと思はれる――曾子語錄を篇頭にそのつぎに第一六章をおき、子張語錄につづければよい。しかるに彼は子張にはじまる系列に子張の批判者として曾子を最後においている。このことは彼の前に既に歷史的傳統をもつて、一つのかたまりとしての語錄集が存在していたことを暗示している。

その語錄はどのようなものであつたか。第一章から第一五章までであつたのか。第一五章子游曰、吾友張也爲難能也、然而未仁、は子張批判であるが、子游を子張の批判者としているにしては、子游語錄は第一四、一五の兩章にすぎず、あまりにも貧弱であり、第一五章は第一六章を呼びおこすもので、强い主體性をもたない。又、第一四章子游曰、喪致手哀而止、も思想としては獨自性に乏しく、第一二章の子游の言葉の反復の氣味があり、八佾第三の第四章、林放問禮之本、子曰、大哉問、禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚、などに見える思想の同義異語でもある。かつ前後の章の形式からみて不釣合であるので、第一四、一五章の存在するかぎり、第一二章中に入れてしまわざるをえない第一三章子夏曰、仕而優則學、學而優則仕の存在より見ると、曾子學派に屬する編集者が入手したものは、第一章よりはじまり第一三章におわる子張子夏語錄で、それのみで明白に完結性をもつものであつたのだ。子游語錄はそれ自體として獨行したものではなく、子夏語錄と曾子語錄との間のセメントであつて、それをくつつけたのは、ここで問題となつている編集者である。

彼は既存の子張子夏語錄を入手し、これが孔門の高弟達のものであり、內容も高いものであつたが故に、この語錄を自派のものにしようとして、その構成を研究し、末尾に曾子の語錄をつゞけ、一貫した有機性をそこに與えようと努力した。かくて第一三章までならば、必ずしも連鎖的とは言えなかつた編集形式が、子張語錄に子夏語錄をつゞけた方法にならつて、子游の語を子夏のにつゞけたことによつて顯在化したのである。ここにおいて第一三章の子夏言がうきあがつたのである。しかし第一三章を第一二章に從屬させることは他に例もあるので、そのままにして既存のものに變更を加えずにおいたと考えられる。子游語錄の貧弱さはここに起因することは前述のとおりである。ところがこうなると、これまで潛在していた子張が子夏に、子夏が子游にまさるという價値判斷の序列が明確になる。この意味でも子游から曾子への移り目は、子張を批判するものにならざるをえない。しかも同時にこれは曾子學派が子張子夏子游達への對立者である歷史事實によつてもうらずけられ、肯定されることである。現實に子張篇だけでも曾子は子張の批判者、つまりより高い第三者的立場を保ち、その立場は子張におとるような構成下にある子夏、子游にもおよぼされている。

ここで附加された曾子語錄の質は必ずしも高くはない。量は子夏や子貢のに比しても遜色はないにしても、質は劣るのではないか。群としてこのような語錄の類が他にあるかの面から考察すると、子張子夏子貢のは單獨には存在しても、語錄集としては見當らない。しかるに曾子のは泰伯第八に第三・四・五・六・七の五箇章が群として存在している。この量は子張篇中の諸子の語とつりあい、格調も極めて高い、まことに堂々たるものである。この群が獨行しておれば當然この子張篇に來て宜しいのである。しかるにそうではない。又、この群の間に何の重複もない。この泰伯篇第八の曾子語錄が知られていなかつたのではなく、それがその頃も群として獨行していたのでもなく、實に篇中の一部になつていて、如何とも動かしえなかつたが故に、子張篇中の曾子語錄は雜章の集りとなり、質の相對的低下はまぬいたのも必然的と云える。子張、子夏、子貢の語の格調の高さは、精粹として集められたのであるが故であり、曾子のは他に使用されていたが故に低いことになる。そして、このような事實は論語成立期の狀況の若干と、子張篇の成立の仕方と時期を暗示している。

次に第一章から第一三章までの語錄がどのようにして存在するにいたつたか、このような形態にしたのは、どのような編集意識によるのか、その人の學派性はどうなのかをこれから考察したい。端的に言え

ば子張學派の人か子夏學派の人かが疑問となる。

これまでの分析から言えば子張が優位であるようだが、量より見れば子夏がまさつている。しかも子游語錄がとりざられた狀態では、價値批判の行はれている第三章と第一二章の性格の解釋は變えられないにしても、子夏より子張が、子游より子夏がという價値の序列は、編集上からは稀薄となつている。では何が發見されるか。

第一三章子夏曰、仕而優則學、學而優則仕、を第一二章に從屬させることの可能性に先に一寸とふれたが、ここでは別章として考えて見よう。秋月胤繼氏は、「論語義解」（岩波書店刊）の中で、この章の意義上の構成について、「文章の上より見れば前後の二句は平說なれど、意義の上より見ると、逆なるを上に置き、順なるを下に置けるより考ふると、重きを前句に置けると見るべし。」（同書六三頁）と述べておる。これは第一二章での子夏の門人教育談の再確認、强調がこの第一三章の中心であることを意味することになる。第一二章の後に、編集者が第一三章をつけた理由もここにあるとしてよろしかろう。第一二章の子夏の優位性の更に確認のための追加である。これをした人は當然、子夏系統と言はねばならない。勿論、後代の作爲の可能性を否定はしないが、一寸と無理ではないか。尙又、第一四章は既に述べたが、弱いものであり、何等第一三章をうち消すものでない。やはり第一五章をよびおこすものにしかすぎない。

私はこの論を一歩すすめて、子張子夏語錄集をつくつた人は、實に子夏の派であることを證明したい。子夏の語の量のまさるだけではなく、兩子の語錄の結合點第三章は、第四章、子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、によつて反論されているからである。この「小道」は漢代では「異端」のことであると解され、「小說家」などを指して使用されている（漢書藝文志）。その意味では必ずしも直ちに第三章子張言の反論にならぬようであるが、實は第四章の子夏言は、漢代では孔子の言として傳はつていたらしい。

（漢書藝文志）小說家流蓋出於稗官、……孔子曰、雖小道、必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子弗爲也。

（後漢書蔡邕傳）若乃小能小善、雖有可觀、孔子以爲致遠則泥、君子故當志其大者。（上奏文の一部）

津田氏はその著書で論語では孔子の弟子のことばとしてあるものが、前漢時代の書で孔子のことばになつているばあいのあることを論じ、その一例として前者をあげている（前揭書、四六―七頁）。しかしこのように二例もあると、漢代の論語自體が孔子曰となつていたとした方が宜しい。孔子の語がここに入ることは前後關係、すなわち子張篇が門弟の語錄集である點より見て、全く異樣なこととしなければならぬ。しかし第三章に附して考察すれば、その意味はとける。子夏言に對する子張の反駁の格調の高さを消すには、子夏の語を持つて來ても弱く、水掛け論になるし、適當な材料もなければ、當然孔子の語を持つて來て、ガンと子張をたたくに越したことはない。後漢書の蔡邕の上奏文にいうごとく、小能小善をすて、大いなるものを志すという孔子の語は、第三章の子夏の言を充分以上にバックアップしているのである。

（附注）憲問篇第十四にある左の例は、孔子の語を曾子の語でうらづけているが、これなど類似した編集意識である。

第二七章　子曰、不在其任、不謀其政。

第二八章　曾子曰、君子思、不出其任。

以上の研究によつて、第一―一三章の語錄を作製したのは子夏學派の人であることは確實となつたと思う。彼はどのような經過で編集したか。そもそも第四章が存在するのは、第三章の性格が困るからである。それを除外することができなかつた事情、すなわち子張語錄の既にかたまりとして存したことによつて、第四章を既存の子張語錄の後につけ、子夏語錄を編集し、この形態は既存の子張語錄にまね、最末

尾に第一三章を置き、かくて子夏は子張、子游にまさる者となり、子夏派の一つの語錄が質量ともに完成されたのである。それ故に第四章と第一三章の機能が無視される構成に變化した時、すなわち子游語錄の獨立、曾子語錄の追加が行はれゝば、第四、第一三章の本來の意義は忘れられ、これまで眠つていた價値の序列が顯在化し、意識されることにもなる。

最後に第二〇章より末尾の第二五章にいたる子貢語錄について考察しよう。曾子語錄の終りの第一九章、孟子使陽膚爲士師、問於曾子、曾子曰、上失其道、民散久矣、如得其情、則哀矜而勿喜、と第二〇章、子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉、との間に顯著な關連は認められない。又、これ迄にあつたような價値判斷も全く存在しない。その意味でも全く斷絶していて、單に六つの章がくつついているだけのように見える。

子貢語錄の特徴は孔子の偉大性の讃美である。その場合、第二三・二四章では叔孫武叔が孔子を貶し、子貢をまされりとしているし、最末尾の第二五章では陳子禽が子貢を恭の點で孔子よりもまさるとしている。勿論、子貢はそれに答えて孔子の偉大性を述べているが、これはどうも其の裏を考えねばならぬようだ。これらの章の筆記者、あるいは採取して編集した人は、子夏を孔子とならぶほどの人、世人には孔子よりもすぐれていると思はれている人とする印象を、すなわち當然他の弟子よりも傑出しているとの印象を與えんと企圖している。子貢が孔子の偉大性を强調すればするほど、彼自身を高めているのである。末章をふりかえつて考察しよう。「陳子禽、子貢に謂いて曰く、子は恭と爲すべし、仲尼豈に子より賢らんや、」。劉寶楠は正義において、「爲恭者、言爲恭敬、以尊崇其師也、」と解しているが、穩當な說である。そうすると、子貢がこれに答えて、いかにそのような發言が不遜であり、孔子が及ぶべからざる偉大性をもつと言つても、それは實は子貢のその師に對する恭敬を實證するだけであり、陳子禽が仲尼を子貢よりも賢らずとする發言の答にはなつていないのである。「やはり子貢先生はえらい人だ、」という讃美の念を讀者におこさせるのである。すなわち、この語錄における特徴であつた孔子の偉大性讃美は、こう考えてくれば實は子貢の讃美でもあつたことになる。

このように純然たる子貢贊美の語錄を曾子語錄に續けた人はいかなる人であるか。手がかりは、この語錄の性格、特に第二五章に典型的にあらわれているものと、曾子語錄との間の斷絶とである。彼の續編の際にいだいた編集上の意識を、彼の身になつて再構成してみよう。彼は第一章から第一九章にいたる語錄集を入手して、これが連鎖式に價値批判を伴いつつ編集されていることに當然注目したと思う、何故ならば、既述したように、このやり方は價値判斷は別として、論語中にもあるし、他にもあつたと思はれる。そこには價値の序列が顯在化し、子張、子夏、子游とくる價値ずけを、曾子語錄を增結した人が、子張を批判することだけによつて受けとめ、曾子の存在を批判者として主張した後では、曾子をおさえて子貢をもちあげても、必ずしも子貢が前四者よりも偉大であることにはならない。それならば無理に連鎖式編集を行う必要はないことになる。その代りに、子貢の偉大性が孔子に比肩しうるほどであることを述べるものがあればよく、第二三・二四・二五の諸章はそのような要求にも充分にこたえている。ここにおいて、子貢語錄は何等、前章に顧慮することなく、斷絶したままで增結され、かくて現在の子張篇は完成し、この仕上をしたのは子貢學派であることになる。故に最終的には子張篇は子貢學派所得ということになり、武内義雄氏の說と一致はするが、結論においてのみであることは言うまであるまい。

結論的にこれまでの研究をまとめ、更にそれへの反省、今後の見透しをつけることにする。

子張語錄（第一章―第三章）が既に存在し、それを入手した子夏學派が更に子夏語錄を追加して、子夏の優趣性を構造的に確立しようとした。それが第一段階（第一章―第三章の成立）であつた。その子張子夏語錄に細工をして、曾子學派のものたらしめたのが第二段階（第一章―第九章の成立）である。次に子夏學派がその語錄集に子貢語錄を續集したのが第三段（現在の子張篇）である。決して子張、子夏、子游・曾子、子貢などの語錄がそれぞれ別に行はれていて、ある時期にある特定の人によつて續集されたのではない。順次に學派性のことなる人々によつて續集されたのであつて、その過程は層となつて殘存し、又それぞれ有機的統一を有しているのである。

今日の目より見れば、非常に少さい語群が學派から學派へ動いていつたように感じられるであろう。しかし現に編者の黨派性、更には各章の筆者の黨派性が明らかに認められるが故に、この分析が行はれ得たのである。この黨派性の、つまり筆者なり編者なりの意識の否定が成立しないかぎり、この研究の結論は、細部はともあれ全體として正しい。故に頻繁なる學派間の異動は、その今日では短いかも知れぬテキストの高弟達の語錄の精粹としての希少性とそれに伴う價値を示めし、群の標準的な大きさを推定させ、論語のできあがる筋道と狀況を漠然と教えてくれる資料と考えるべきである。

次におこる疑問は、この分析が正しいとすれば、黨派性を有する編者がその腕をふるいえた材料となつた章が子張篇に數多くあることになるが、それらの章の信憑性はどうか、高弟達と筆錄者と編者との關係はどうかであろう。非常に多くの材料を有していたが故に、その中から選澤したとは考えられない。しかし曾子學派の編者が、泰伯篇中の曾子語錄の群を使用せずにすませ得た程度のゆとりはあつたと思う。問題の第四章、第一三章、第一四章などいずれも短い章である。子貢語錄の高い讃美の調子は、孔子を仲尼と呼ぶことなどと相俟ち、後の時代のもので、それだけ孔子を神秘化しており、編者の手が入つたと云うよりも、そのようなものとして既に存在していた、それを利用したと私は考える。尙、このような群の思想的社會的性格については、別に論じたい。

論語がいかにして編集されたかは、千古の謎であり、武内博士のように論衡正說篇の記事という大膽な前提の上に立つても充分には判明しなかつた。私のこの論文における研究は、論語の中では後期のものではあるかも知れないが、その中には古いものを含む子張篇を分析することによつて、はじめて推定的ではなく、相當程度にまで實證的に論語の一部についてその成立過程と、特殊な編集意識を見出すことができた。その論語批判上の意義を具體的に申せば、武内博士の結論については、子張篇が子貢學派のものであることは正しいが、子貢語錄の量にそれはよるのでなく、テキスト移動の終點であつたのであり更に河間七篇本を曾子、下論の七篇を子貢の系統とするには、テキストの移動が兩派の間に證明されたのであるから、もつと愼重であらねばならぬことになる。又津田博士の說に對しても、氏は不可能であると若干の例から論證しているが、この方法によれば、論語の成立過程とその新古の層、學派性を實證できたのであるから、更に方法を研究し多樣化すれば、新しい展開が期待できるであろう。

附論　意味上の群について

―特に章の主從關係を中心として、

論語解釋において、各章は獨立に理解されてきている。根源的にはそうすべきであるかも知れないが、個々に異時に成立したものにしても、それが編集されつゝあるとき、意味上の關係によつて連續してならべられたこと、附加挿入されたことがあつたであろうことは否定できない。それも一種の群（量は、二三章であるにしても）であり、形態上の群とはことなるから、今後の研究發表上、先に論ずることが必要であると思うのでここに述べる。尙、このならべ方は、一種の解釋にもとずくからこの研究は論語の最古の解釋上の資料をとりだすこととなる。この種の群は主たる章が前に、從たる章が後にくるのが通例である。そこで今日の解釋でも獨立の章とは認められていない章、すなわち形態上は獨立的であり、意味上は前章をまたねばならぬか、或はその補遺である章を檢討し、次に漸次に獨立的なものに論をすすめることにする。

次の諸例は一章中に「子曰」が二つあり、文章法上の關連がその兩語間に存しないのに、しかも獨立させ得ないものである。おおむね、異時の言として注されている。

（子路篇第二二章）子曰、南人有言、曰、人而無恆、不可以作巫醫、善夫、不恆其德、或承之羞。子曰、不占而已而矣。

（子罕篇第三二章）子曰、可與共學、未與適道、未可……、唐棣之華、偏其反而、豈不思、室是遠而。子曰、未之思也、夫何遠之有哉。

この形において、やゝ後出の「子曰」が獨立性を得たものに、

（先進篇第二〇、二一章）子張問善人之道、子曰、不踐迹、亦不入於室。子曰、論篤是與、君子者乎、良莊者乎。

この章で劉氏正義は邢疏の「此亦善人之道也、故同爲一章、當是異時之語、故別言子曰也。」に同意しているが、確かに一章とも見做しうる。同じく子罕篇の第六章と第七章も別章となしうるか否か疑問視されている。

太宰問子貢曰、……子聞之曰、太宰知我手、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也。

牢曰、子云、吾不試、故藝。

「これは兪越もいつた通り、上の吾少也賤、故多能鄙事、の異文を附け加えたもので、これを見ても此篇が種々の材料をあつめて成つていることが判る。」（武内、九七頁）は正しい。同じく憲問篇第三九、第四〇章の場合も一章であることは、劉氏正義の「復稱子曰者、移時乃言也、」をまつまでもなかろう。

子曰、賢者辟也、其次地其次辟色、其次辟言。

子曰、作者七人矣。

以上の諸例は論語の通例からすれば二章とすべきも、後の章は前の章をまつて或は互に補いあつて、はじめてその意味は明白にしうることを示めしている。少くとも編者には、その意識が存在するとしてよかろう。

次は意味上の關連性によつて二個或は三個の章がならぶ場合である。この場合もおおむね注釋的な章が後についている形が主である。おそらく前の章に對して類似しているか、意味をよく明確にするという意圖の下で、このような編集が行われたのである。以下、順を追つて、適當な實例をあげつつ證明し、說明してゆこう。

論語中には重出する章が若干存在する。その中には明らかに注釋的な章として附加されたものも多い。もつとも新しい附加は、學而篇と陽貨篇とに重出する、「子曰、巧言令色、鮮矣仁、」であろう。これは陽貨篇においては、皇侃義疏本・足利學校義疏本・足利學校古本に存

せず、唐石經では傍添である。明らかにその前にある第一六章、「子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也、古之狂也肆、今之狂也蕩、古之矜也廉、今之矜也忿戾、古之愚也直、今之愚也詐而已矣、」に附屬するものである。同じく憲問篇では、

（三一）子貢方人、子曰、賜也賢乎我夫、我則不暇。

（三二）子曰、不患人之不知已、患己無能。

この第三二章は他に類似した章が、學而篇第一六章、里仁篇第一四章衞靈公篇第一九章、などに見えるが、特に衞靈公篇の「子曰、君子病無能焉、不病人之不已知也、」に酷似している。おそらく憲問篇の場合は、第三一章の說明の充足である。――重出章句については、別の機會に一章を設けて論ずる。

武內氏は論語の一篇にかゝれた文字數は八乃至十字位であろうことを言つているが（前揭書一八七頁）、これまであげた從屬的な章がそれに近いことは興味がある。そこで次に、そのような形態のものに目をつけると憲問篇の第一一章がまず問題となる。その理由は第一に憲問篇の第九章から第二〇章まで、いずれも賢相のことを論ずるに比較的長文であるのに、第一一章のみ賢相と關係がない十二字の短文であり、次に內容的に見ると第一〇章の「人也、奪伯氏駢邑三百、飯蔬食、沒齒無怨言、」の注として、第一一章「子曰、貧而無怨難、富而無驕易、」があると考えられる。しかも學而篇の第一五章「子貢曰、貧而無諂、富而無驕何如、子曰、未若貧而樂、富而好禮者也……」に極めて類似しているのであるから、いよいよ非獨立的從屬的と言はねばならぬ。

注、安井小太郎「論語講義」六四〇頁は諸說をひいて第一一章の非獨立性を論じている。

更に例をあげると、憲問篇の第四四章で、

（四三）子張曰、書云、高宗諒陰三年不言、何謂也。子曰、何必高宗古之人皆然、君薨百官總己以聽於冢宰三年。

（四四）子曰、上好禮則民易使也。（十字）

この場合など、第四十一章から第四七章にいたる間、この第四四章をのぞいていずれも長く、そのこと自體後からの挿入を思はせ、意味上も第四三章に屬する。

かくて長い文につづく短文の章という條件のみの下でも、附屬する章の見分けは可能となる。衞靈公第十五の場合、

（三五）子曰、民之於仁也、甚於水火、水火吾見蹈而死者矣、未見蹈仁而死者也。

（三六）子曰、當仁不讓於師。（八字）

又、陽貨第十七では

（一二）子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與。

（一三）子曰、鄕原德之賊也。（八字）

同じく、これは二個の章が附屬する例として、

（一四）子貢問曰、君子亦有惡乎、子曰、有惡、……（約六六字）

（二五）子曰、唯女子與小人、爲難養也、近之則不遜、遠之則怨、（二十字）

（二六）子曰、年四十而見惡焉、其終也已。（十三字）

右の例にまでなると附屬の章まで長くなつてくる。そこで二例について先人の說をあげて補强しよう。八佾第三、

（二）三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆穆奚取於三家之室。

（三）子曰、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂樂何。（十六字）

武內義雄は第三章を錯亂として位置を變えることを主張しているが（前揭書一一六、一一三頁）、劉氏正義が皇疏の「此章亦爲季氏出也」をとつているように、或は前後の流れにあはなくても、第二章の附屬とすれば何でもない編集である。次は武內氏の說に同意する例で、爲政第二、

（九）子曰、吾與回言終日、不違如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚。

（一〇）子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉（二二字）

（一一）子曰、溫故而知新可以爲師矣。（一二字）

右の第一〇章と第一一章は前章をうけて、顏子を愚ならずと鑒定した方法と、其德の師たるに足るをほめたたえた語と見て（武内氏、一一四—一五頁）、從屬的なものとしてよかろう。

次に字數は似ているが、意味關係の認められるものについて、その存在を論じたい。最も明確にそのことの證據になるのは、陽貨篇第二、第三章である。この兩章は、第一章「陽貨欲見孔子……」（八一字）と、第四章「子之武城……」（六五字）という長文の章の間にはさまり、いずれも一〇字の短文でそれが二章連續している點で、二章一群として目立つものである。

（二）子曰、性相近也、習相遠世。

（三）子曰、唯上知與下愚不移。

これなど第三章が第二章に附言している編集である（註）。又、憲問篇の

（二七）子曰、不在其位、不謀其其故。

（二八）曾子曰、君子思、不出其位。

なども同樣である。尙、衞靈公篇の第一九・第二〇・第二一章も、第一八章より第二三章におよぶ「子曰、君子……」の形式による群に屬しつつ、意味上の關連も有するものである。

以上、意味上の關連が章相互間に認められることを論じてきた。この現象は今日の論語の原型成立前後にわたつて、種々の理由のもとに發生したものであるが、ともかくも解釋において充分に考慮しなければならないことだけは指摘し得たと信んずる。

（註）この式のものが發展すると、學而篇第一一章の

子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣。

のようになる。これは武内氏の說くごとく（九三頁）、前半二句は鄭本衞靈公篇に、後半二句は里仁篇に獨立に存在する二つの章の合成である。同じく第八章（九三頁參照）の場合も同樣である。